

## 《近江茶を茶畑からお茶の間へ》

野洲郡 自園近江茶・製造卸・直販  
中主町 南製茶

野洲郡中主町乙窪122

様々な歴史を水面に映し、四季折々の容姿をみせつづけてくれる、かつて豊積の里と呼ばれた中主町は野洲川河口に広がる肥沃な沖積平野に立地する穀倉地帯として発展してきました。湖岸地帯では、風光明媚な琵琶湖岸の自然と景観を活用したオートキャンプ場や食文化の郷が立地し、新たな観光地として多くの人の利用がみられるようになりました。人口は約1万2千人、近年微増傾向を示しており、ルート477号線周辺も序々に商業施設の建設計画が進められています。中主町で町おこしを目的に独創的な銘柄を造り、商品化を志すグループ“雲天番展”(うんてんぱんてん)に所属して積極的な情報発信を行うとともに、近江茶の製造直販で支持を得ているのが今回紹介する「南製茶」です。

### 近江茶本来の味を家庭に

「当店の生い立ちが明治初期にさかのぼります。醤油・酒・近江茶など幅広く製造販売を手がけてきましたが、昭和45年現社長の父親が本家と分家して茶の製造販売としてスタートさせました。」

近江茶の歴史は古く、一説では今からおよそ1,200年の昔、比叡山の開祖、最澄(伝教大師)が唐(中国)より茶の種子を持ち帰り、比叡山山麓、坂本に種を播いたのが始まりと伝えられています。当店のお茶はこの歴史ある近江茶を、自園を中心に、製茶から仕上げ加工に至るまで一貫して精選加工してまろやかな味と香りを作りだしました。そしてソフトな味のブレンドを追求した近江茶を各家庭に提供することをモットーにしています。

当店の横には茶精選加工場が併設されており、精選仕立ての商品が店頭に並ぶ仕組みで、鮮度と品質保持の管理は万全の体制を確立しています。一部を除いて殆どの茶製品は自店オリジナルであり、お茶を飲むシーンを想定した提案型の商品は特に根強いファンがついています。なかでも極上粉末の玉露をブレンドした頑固すし職人が選んだこだわりの“すし職人のお茶”、「気取らず・気張らず・簡単抹茶」をコンセプトにした、抹茶碗、茶筌、茶杓、お茶うけ菓子を組み合わせた“お手軽抹茶セット”は人気を呼んでいます。

### 中主町の銘品を全国へ

郷土の名品展グループ“雲天番展”は現在7店舗から構成されています。当店以外の店舗での取り扱い商品には郷土名菓・有機栽培米・創作陶芸・中主米使用日本酒・湖国水産加工品などがあり、各店のこだわり逸品を詰め合わせて贈り物やお土産の提案を行っています。酒を組み合わせたセット商品以外はこの7店が販売窓口になり注文を承っています。また各店の取り扱い商品の単品も関連陳列や販売をそれぞれの店で実施して品揃え幅を広げています。

また詰め合わせ商品のパンフレット、郷土銘品店イラストマップを作成し、物産展でのPRや営業に活用をしています。今後はインターネットのホームページへ開設に向けて、中主町商工会のアドバイスを受けながら情報化作業を進

めている最中でもあります。

### **近江茶の新たな需要を目指して**

現在茶葉の需要は缶入りドリンクやペットボトル入りドリンク類に押されがちです。滋賀県下の茶葉小売業も減少の一途を辿っていますが、南社長は滋賀県茶業会議所の広報委員、企画委員を歴任された経験から、日常生活のなかでの近江茶の再発見について意見を持たれています。

「普段あまり意識されていないお茶には多くの効用があります。消費者の甘さ離れなどの健康ニーズの高まりに応えて、より強く有効性をPRしていく必要があります。」

既に確立されている通信販売や卸のチャネルを強化するとともに、缶入りドリンクや今後開発が望まれるペットボトル入りドリンクを通して、若者にも手軽に購入される美容と健康にも配慮した商品作りが新たな需要を生み出していくといえるでしょう。

(中小企業診断士 鐘井 輝)

滋賀県中小企業情報センター「月刊 企業の窓」1998年7月号執筆原稿